【登場人物表】

柳　駿也（22）重機オペレーター
立浪　未央（20）学生
立浪　佳苗（45）未央の母
立浪　太一（47）未央の父
豊中　祐二（31）柳の先輩
岩永　久（40）柳の上司

アイ（23）マッチングアプリで知り合う女
長山（20）未央の同級生
畑（20）長山の友人
店長（50）コンビニの店長
橋本（24）コンビニスタッフ
津山（34）誘拐犯
兵頭（29）津山の手下

○工事現場・詰所内（昼）

柳駿也（２２）、軽く俯いて立っている。

岩永久（４０）、足を組んで座っている。

岩永「お前これで何回目だ」

柳「三回目です」

岩永「四回目だ。勝手に減らすな」

柳「すみません」

岩永「ただでさえ工程が遅れ気味だってのに。寝坊してる暇なんか」

岩永の話を遮って、柳のスマホが鳴る。

岩永「おい！　こんな時くらいスマホの電源切っとけ！」

柳「すみません」

柳、岩永にペコペコと頭を下げる。

○工事現場・詰所外（昼）

柳、外に出るなりスマホを取り出す。

豊中祐二（３１）が近づいてきて、柳の肩に手を回す。

豊中「柳ちゃ～ん、また怒られてたなあ？」

柳「っしゃ！　（小さくガッツポーズ）」

豊中「なに喜んでんだ？」

柳「（マッチングアプリの画面を見せながら）この子から返事来たんすよ。今日会えるって」

豊中「なあんだ、マッチングアプリか」

柳「これで久々に彼女ができる～！」

○工事現場・作業場・ショベルカー内（昼）

柳、上機嫌でレバーを操作している。

○工事現場沿いの道路（昼）

立浪未央（20）、柳の操作するショベルカーを目にし、ふいに足を止める。

○工事現場・作業場（昼）

豊中、タオルで汗を拭きながら柳に寄ってくる。

豊中「おい柳、女の子との待ち合わせ、ここ指定したの？」

柳「してないっすよ」

豊中「じゃあ誰だよあの子（未央を顎で指す）」

柳「ええ？　知らないっすよ」

豊中「でもさっきからずっとお前のこと見てるじゃん」

柳「だから知らないですって。それにああいう地味な子タイプじゃないし」

豊中「まぁいいからお前ちょっと行ってこいよ」

柳「はァ…？　それなら豊中さんが行けば」

柳、豊中に背中を強く押されて、よろけながら歩み出る。

豊中を振り返るが、シッシッと手を振って急かされる。

○工事現場・進入禁止ポール付近（昼）

未央、柳が操作していたショベルカーを見つめている。

柳、未央の視線に割り込む。

柳「あのお、すいません」

未央、怪訝そうな顔で柳を見る。

柳「あのお、何か用すか？」

未央「別に。見てるだけです」

柳「はあ。見てるだけ」

未央「駄目なんですか？　迷惑はかけてないと思いますけど」

柳「いや、駄目っていうか、こっちも作業に集中できないんで」

未央「見てないです」

柳「は？」

未央「あなたのこと見てるわけじゃないんで」

柳「いやいや、ずっと見てたじゃん」

未央「私、人間になんか興味ないんで。勝手に思い上がらないでくれます？」

未央、立ち去る。

柳「はあ？　なにあいつ。意味わかんねぇ」

○ラブホテル・内（夜）

柳、アイ（23）とベッドに横たわっている。

柳「でさぁ、私、人間に興味ありませんから、とか言うわけよ。めっちゃキモくない？」

アイ「なにそれ超面白い」

柳「絶対彼氏ができないタイプだわ」

アイ「ちょっと、それは言い過ぎ」

柳「俺はアイちゃんみたいに素直で可愛い子のほうが百倍好き～。う～ん（アイにキスを迫る）」

女「キャハハ。もう、やめてよ」

柳「いいじゃん、もう一回」

柳、電気を消す。

○工事現場・詰所内（昼）

職人たちが各々昼食を食べている。

柳の前には、コンビニのおにぎりとチョコ。

豊中「うわっ、またチョコおかずにして飯食ってる」

柳「いいじゃないすか、これが俺のスタイルなんですよ」

○詰所内のテレビ・お昼の情報バラエティ

司会「続いては、世界のびっくりさん、のコーナーです。本日ご紹介するのは、イギリス在住のこちらの女性。彼女のパートナーはなんと、世界的にも有名なあの時計台」

○工事現場・詰所内（昼）

柳、窓の外に目を向ける。

ショベルカーを見つめる未央が見える。

豊中「（テレビを見ながら）へ～、世の中には変わった人もいるもんだな」

柳「へ？」

豊中「テレビ」

柳「あ、あぁ」

レポーター「ではあなたの感情は愛着ではなく、恋、で間違いないと？」

英国人女性「はい、そうです。一日中彼、つまり時計台のことを考えては胸がドキドキしています。そして彼も私を見つけるた

び、温かな心で迎え入れてくれるのです」

柳、むせる。

未央とテレビを交互に見る。

○工事現場・進入禁止ポール付近（昼）

柳、ショベルカーを見つめる未央に近づく。

柳「なあ、お前ってショベルカーが好きなの」

未央「……（柳を無視する）」

柳「なあって」

未央「お前って呼ばないでください」

柳「はいはい、すみませんね。じゃあ名前、何ていうの」

未央「教えたくありません」

柳「ハァ〜？　あっそ。じゃ、もういいわ」

未央「どうぞお構いなく」

柳、未央に背を向け歩き出す。

途中、チラッと振り返って

柳「あんたのそれって、ただのメカ好き？」

未央「……（柳を無視）」

柳「それとも恋しちゃってる感じ？」
未央「なっ！　（驚き、怒った顔で柳を見る）」
柳「図星じゃん。やべ～」

○工事現場・詰所外（朝）
岩永を中心に朝礼をしている。
岩永「皆おはよう。今日も一日ご安全に！」
一同「ご安全に！」

○工事現場・作業場・ショベルカー内（朝）
柳、レバーを操作して土を移動させている。
いつもの場所に未央が現れるのを見つける。
柳「また来た」

○工事現場・進入禁止ポール付近（朝）
うっとりとした目でショベルカーを見つめる未央。
その中にいる柳が垣間見えると、途端

に怒りの表情へと変わる。

○工事現場・詰所外（昼）

豊中「あ～やっと休憩だー！　柳コンビニ行こうぜ」

柳「ういーす」

○工事現場・出入り口（昼）

柳と豊中、未央がショベルカーの写真を撮るのを見ながら

豊中「熱心だねぇ」

柳「何がいいんだか」

バイクに乗った長山（20）と畑（20）が、二人の傍を通り過ぎる。

○工事現場・進入禁止ポール付近（昼）

長山、未央に気付いてバイクを急停止させる。続く畑。

長山「立浪？　おい立浪じゃんかよ」

畑「誰？　知り合い？」

長山「中高の同級生。久しぶりじゃん。こんな所で何してんの」

未央「……（長山を無視）」

○工事現場・出入り口（昼）

豊中「（長山らを見て）なんか感じ悪ぅ」

柳「俺らには関係ないんで放っときましょ」

柳と豊中、未央らと反対方向に歩き始める。

○工事現場・進入禁止ポール付近（昼）

長山「もしかしてまた新しいターゲット見つけた感じ？」

畑「え、なに、どういうこと」

長山「こいつの歴代の彼氏、すげえんだぜ」

○コンビニに向かう道中（昼）

柳、尻ポケットを叩く。

柳「あー、やべ、財布忘れた。豊中さん、先行っといてくれます？」

豊中「財布って、お前いつもスマホで」
柳「すぐ戻るんで」
駆け足で来た道を戻る柳。
○工事現場・進入禁止ポール付近（昼）
未央、鞄に付けた恐竜のキーホルダー（リボンつき）を握り締めている。
畑「ぎゃははは！」
長山「でさぁ、高校の時は恐竜。学校で博物館に行った時、こいつ展示物の前から動かなくなってさ。それからも時々授業サボって見に行ってんの」
畑「えー、やば」
長山「で、今は？　（周囲を見る）工事現場？　このポール？」
未央「……（長山を睨む）」
長山「教えてくれないならスマホ見せてよ。写真のとこだけでいいからさあ。またどうせ大量に写真撮ってるんだろ？」
長山、未央のスマホに手を伸ばす。

未央「嫌！　やめて、離して！」

柳が駆けつける。

柳「おい、お前ら何やってんだ。嫌がってるだろ」

長山「やっべ」

長山と畑、バイクに乗って逃げ去る。

柳「なんだ？　アイツら」

未央、スマホとキーホルダーを握り締めて固まっている。

柳が踵を返そうとすると

未央「どうして助けてくれたんですか」

柳「え？」

未央「この前、私を馬鹿にしたような態度取ってたくせに」

柳「助けてもらった第一声がそれ？　はぁ～。あんなのに絡まれてるの見たら、こっちまで気分悪いんだよ。それだけ」

未央「もういいんで放っといてください」

柳「言・わ・れ・な・く・て・も。てか、普通に堂々としてればいいじゃん」

未央、柳を上目遣いで睨む。

柳「ずっと『そう』なんだろ？　だったら必要以上に気にすること無いじゃん」

未央「別に。そうしてますけど」

柳「自分の性癖なんて理解されるはずないって自意識、めっちゃ出てるけど」

未央「私の何がわかるんですか！」

柳「わかんねぇよ。毎日何時間もショベルカー見てさ。こっちの問いかけは無視するし、なんか知らねぇけど怒ってるし、理解のしようがねんだわ」

未央「素直に答えたら理解してくれるんですか」

柳「するかもしんねーだろ」

未央「絶対無理です」

柳「ほら、そういうとこ！」

未央「私、あなたが嫌いです」

柳「は？　いや、待って待って。そこまで言う？　俺さっき助けたよね？　そもそも最初から俺に対する態度酷くない？」

未央、ショベルカーに目線を移す。

柳、未央の目線を追って、ショベルカーに辿り着く。

柳「まさか……俺のこと恋敵だと思って妬いてる？　俺がアイツといつも一緒だから？」

未央、見る間に顔を赤面させていく。

柳「いや、ちょ、お門違いだから、分かるよね、ね？　畜生、なんで俺がこんな、ああもう！」

未央、恥ずかしくなって走り去る。

柳「こんな三角関係ありえねえって！」

○工事現場・出入り口（昼）

豊中、二ヤ二ヤして柳を待っている。

豊中「なんだ～、優しいとこあるじゃないのぉ～」

柳「見てたんすか？　先行ってくださいって言いましたよね？」

豊中、目線高にコンビニ袋を掲げる。

柳「（呆れたように）食欲と野次馬根性が凄い」
豊中「柳の分もあるよ」
柳「奢りっすか？」
豊中「瑞々しい恋の始まりを祝してやるか～」
柳「いや、それどころじゃないんですって。
それに俺にはアイちゃんがいるし」
豊中「えーなんだつまんねぇの。じゃ、五百
円」
柳「はいはい」

○工事現場・作業場（朝）
岩永「今日も一日ご安全に！」
一同「ご安全に！」

○工事現場・作業場・ショベルカー内（昼）
柳、レバーを操作して地面を均している。
未央、いつもの場所に現れる。
柳、ショベルカーを未央のほうへ発進させる。

柳「サービス、サービスぅ。（適当な節で）俺は～敵なんかじゃ～ないんだぜ～」

○工事現場・進入禁止ポール付近（昼）

未央、ショベルカーの接近に目を丸くする。

目の前でアームが高く持ち上げられ、顔をほころばせる。

○工事現場・作業場・ショベルカー内（昼）

柳、未央の嬉しそうな様子を見て、満更でもない表情を浮かべる。

すると未央が目線を柳に移す。

柳を認めて一瞬真顔に戻るが、柳を少し赦したように微笑を浮かべる。

その表情にドキっとして、息をのむ柳。

○工事現場・作業場（昼）

岩永が歩いて柳のショベルカーに向かっている。

岩永「柳、止まれ！　すぐに降りて来い」

○工事現場・作業場・ショベルカー外（昼）

柳、岩永に軽く頭を下げている。

岩永「勝手に持ち場から離れる奴があるか！」

柳「すみません」

岩永「クビになりたいのか？」

柳「いいえ」

柳、チラッと未央を見て、こっそり舌を出しておどけてみせる。

未央、やれやれと苦笑いして首を振る。

岩永「おい、どこ見てんだ。ちゃんと人の目を見て話を聞け」

柳「は、はい」

○工事現場・出入り口（夜）

仕事が終わって帰っていく職人たち。

柳、スマホを開く。

柳「あ」

豊中「どうした？」

柳「グッバイ、俺のアイちゃん」

豊中「マッチングアプリの子？　振られたの？」

柳「イエス」

豊中「わーそりゃ残念だったな」

柳「イエス」

豊中「でも、なんで？」

柳「アイドンノー」

豊中「お前普通に喋れよ。振られたのにふざけすぎだろ」

柳「アイムベリーショック」

豊中「あー、ショックで？　でも全然顔、ケロっとしてるじゃん。あ、わかった。あの子だろ、いつも見に来てる」

柳「……ノー」

豊中「え～、じゃあなんでそんな平気そうな顔してんだよ。俺なら号泣してるぜ？」

柳「ノー」

豊中「はは。ショックとか言いながら、実は本気で好きじゃなかったんだろ」

柳「……」

豊中「またかよ。いい加減お前そういう付き合い方やめろって」

柳「俺だって、遊びのつもりじゃなかったんです」

豊中「じゃあなんでこんなことになるんだよ。ちょっとスマホ貸してみ。（柳のスマホを見て）またやってんじゃん。なぁ」

柳「だって我慢できないんですもん」

豊中「こんななぁ、体ばっか求められて嬉しい女なんか極一部なんだよ。その人を見て、中身に興味持たないと長続きするわけないじゃん」

柳「相手に興味が無かったわけじゃ」

豊中「お前は自分の欲求を前に出しすぎ。相手を尊重しろ。というか、そうしたくなる相手を探せ」

○工事現場・詰所外（昼）

柳、建物の陰でこっそり猫に餌をやっ

ている。

道に目をやると、いつもの場所に未央がいる。一心不乱にショベルカーの写真を撮っている。

餌やりの手が止まった柳に噛み付く猫。

柳「いてっ。ごめんごめん」

○工事現場・作業場・ショベルカー内（昼）

柳、レバーを操作している。

未央を見るが、目は合わない。柳の外側（ショベルカー）に意識が向いている。

柳「ハァ～、集中集中」

○工事現場・進入禁止ポール付近（昼）

未央の後ろに一台の車が停まる。

窓から立浪佳苗（45）が顔を出す。

佳苗「未央！　こんな所にいたの！」

未央「ママ」

佳苗「学校はどうしたの！　人に心配ばかり

かけるんじゃないわよ！　自分のやってることを自覚しなさい！　ほら帰るわよ！」

○工事現場・作業場・ショベルカー内（昼）

柳、未央たちの様子をあっけに取られた顔で見ている。

○工事現場・進入禁止ポール付近（昼）

未央、車に押し込まれる。

未央「ママ、待って、ママ！」

佳苗、車を発車させる。

○工事現場・作業場・ショベルカー外（昼）

柳、慌ててショベルカーから降りる。

柳「ちょ、ちょっと！」

岩永「柳！　何してんだ。仕事しろ仕事！」

柳、しぶしぶ車内に戻る。

未央のいなくなった空間を見つめる。

○夢の中・何も無い空間

柳、未央と向かい合っている。

未央、そっと柳の腕に触れ、にっこりと微笑みかける。

○工事現場・詰所内（昼）

柳、椅子から転げ落ちて目を覚ます。

周りで休憩中の職人、柳を見る。

豊中「おい大丈夫か」

柳「いって～」

窓の外を見るが、未央はいない。

夢の中で未央に触れられた腕を触る。

豊中「もしかして、あの子の夢見てた？」

柳「（慌てて）なっ！　まさか」

豊中「最近急に来なくなったよな」

柳「そうっすね」

豊中「お前、あの子に何かした？」

柳「は？　何でそうなるんすか」

豊中「女心わかってないからな～」

柳、怒って豊中のお菓子を引っ掴み、

口いっぱいに放り込む。

豊中「おまっ、それ俺の。悪かった、悪かったって」

○工事現場・出入り口（夜）

柳、腰を屈めて猫を探している。

柳「（小声で）ミーコ～。ミーコ～。どこ行ったんだよ。腹減ってるだろ、ミーコ～」

変装した未央、柳の近くを通り過ぎる。

柳、未央に気付かない。

物陰から猫が現れ、柳の前を素通りしていく。

柳「あっ。（猫を追いかけながら）ミーコ、ミーコ！」

猫、未央に追いついて足元に擦り寄る。

未央、変装を取り、猫を撫でる。

柳「あ！」

未央「ミーコって言うんだ、君」

未央、猫を抱きかかえて柳に返す。

未央「はい。探してたんでしょ？」

柳「（猫を受け取りながら）その格好」
未央「これ？　仕方なく」
柳「誰かから隠れてる？」
未央「言いたくない」
　未央、ショベルカーを見つめる。
柳「あ、あの。あれ、乗ってみる？」
未央「え？」
柳「今誰もいないし」
未央「いや、駄目でしょ。怒られるよ」
柳「いやまぁ、うん」
未央「その子も本当は駄目なんでしょ。（猫を見る）いっつもコソコソ餌あげてるけど」
柳「（照れ隠ししながら）みっ、見てたんだ、俺のこと」
未央「あーでも、ま、いっか」

○工事現場・ショベルカー置き場（夜）
　未央、柳の先をどんどん歩く。
柳「なんだよ、さっきは断ったくせに」
未央「乗らない。近くで見るだけ。それに、

バレたところで平気でしょ？　怒られ慣れてるみたいだし」

柳「俺だってちょっとはへこみます～」

未央「嫌なら後先考えずあんま他人に親切にしないほうがいいよ」

柳「じゃあこれは何なんだよ」

未央「お言葉に甘えて欲しそうだったから、付き合ってあげてるだけ」

柳「（棒読みで）わーすげーありがてー」

未央、柳のショベルカーの前で足をとめる。

未央「（うっとりとした目で）はぁ～」

柳、少し離れた所から未央の横顔を見つめる。

未央「ねぇ、少しだけ触っていい？」

柳「別に、いいけど」

未央、そっと車体に触れる。

柳、思わず自分の腕をそっと抱く。

未央「（独り言のように呟く）冷たい。昼間と違って、夜はこんなにも静かで慎ましいん

だね。爪の先まで、なんて鋭くて繊細なの」

未央、両手を広げてショベルカーをハグする。

未央「はぁ。この存在感。なににも動じない落ち着いたところが本当にかっこいい。はっ、照れないで。私はあなたのそういう無骨なところが好きなの」

未央、ショベルカーから体を離す。

未央「（柳に聞こえるように）ありがとう。ずっと、こうしてみたかった」

柳「う、うん。それなら、よかった」

未央「私、立浪未央」

柳「未央？　お、おれ、柳！　柳駿也」

未央「じゃあね、柳君」

未央、跳ねるように走って帰っていく。

柳、ショベルカーに近づいて

柳「（グーパンチしながら）お前、ずるいんだよ。（拳をさすって）何やってんだ、俺」

○工事現場・作業場・ショベルカー内（昼）

柳、レバー操作を停止する。
未央に手を振ってみるが、未央は柳のショベルカーばかり見ている。
肩を落として操作を再開させる。

○居酒屋・外（夜）
柳と豊中、千鳥足で歩いている。
豊中「ナツちゃん待っててねぇ〜ん」
柳「だぁー！　自慢すか。彼女持ちアピールっすか」
豊中「うるへ〜。お前もはよ彼女つくえ」
柳「俺だって……未央ちゃん（しくしく泣き出す）」
豊中「ほぁ!?」
柳「なんで俺を見てくれないんだ、未央ちゃん」
豊中「おい未央ひゃんって誰だよ」
柳「未央ちゃーん！　（号泣しだす）」
豊中「泣くんじゃねえ！　誰がそんなビャアビャア泣く奴好きになんらよ」

柳「だってぇ」

豊中「しゃきっとしぉ！」

豊中、柳の背中をバンと叩く。

柳、よろけて廃ダンボールの山につっこむ。

豊中、柳を放って歩き出す。

柳「うっ、うっ。豊中さん待ってくださいよお！　俺を置いてかないで（手足に絡まるダンボールを見て）ん？」

○工事現場・進入禁止ポール付近（昼）

未央、ショベルカーを見ている。

柳、照れくさそうに未央に近づく。

柳「あの、さ」

未央「何か用？」

柳「えっと、その、今度の日曜、暇？」

未央「なんで？」

柳「実はその、未央、ちゃん、に、自由に触ってもらえるショベル、用意したんだけど」

○公園・砂場（昼）

子供たちが砂遊びをしている。

未央、端で砂をつついて柳を待っている。

子供1「うわ〜！」

子供2「ママあれなにー？」

未央、顔をあげる。

柳、ダンボールで作ったショベルカーを持ってやって来る。

未央「柳君！」

柳「へへっ、どうかな、これ」

未央「凄いよ。自分で作ったの？」

柳「うん、まぁ」

柳、手作りショベルを砂場に置く。

子供たちも寄ってくる。

柳「ここを引くとアームが動いて、こっちがバケット。これで砂をすくったりできる」

子供1「お兄ちゃん、僕もやらせて！」

子供2「私も！」

柳「いいぞ。でもその前にこっちのお姉ちゃ

んからな。順番守れるか？」

子供1「守れるー！」

未央、恐る恐る手作りショベルを操作する。

未央「こう？　これであってる？」

柳「バッチリ。上手いじゃん」

未央「ふふっ」

柳「本物とは比べ物になんないけど、気分は味わえると思う」

未央「私のためにわざわざ作ってくれたの？」

柳「え？　まぁ、うん」

未央「（嬉しそうに）ありがと」

柳「うん」

子供1「ねぇまだー？」

子供2「私も早くやりたい」

柳「わかった、わかった。ほら、ここをこうして」

未央、柳に微笑みを向ける。

柳、未央の視線を気にしながらも、平静を装っている。

○公園・出入り口（昼）

柳「今日はわざわざ、ありがと」

未央「こっちこそ。楽しかった」

柳「未央ちゃん、はさ。なんでショベルカーが好きなの」

未央「……あの日工事現場を通りがかった時、突然ビビっときたの。豪快に、でも黙々と仕事をこなす姿がすごくかっこよくて。あぁ、ずっと見ていたいって。それに、私の気持ちを受け止めてくれるような気がした。彼は決して裏切らない」

柳「彼」

未央「あ、いや、これはちょっとした癖で。はは、気持ち悪いよね、私」

柳「いや、その、うーん」

未央「いいの、気にしないで。わかってもらえるって期待してるわけじゃないから」

柳「なんか、ごめん」

未央「謝らなくていいよ」

柳「初めにからかったりしたのも」
未央「いいよ、もう。私も変な態度とったり
してごめん」
柳「あの、さ」
未央「うん？」
柳「もしよかったら、時々こうして会えない？」
未央「んー」
柳「嫌なら全然っ」
未央「こうしてお喋りするだけだよね？」
柳「うん、するだけ」
未央「そっか。それなら大丈夫」
柳「本当！」
未央「うん。じゃあ、また工事現場で」
柳「うん、また」
柳、未央を見送った後、一人で小躍り
する。

○工事現場・出入り口（夜）
豊中が柳を待っている。
柳、未央のところから走って来る。

柳「すみません待ってもらって」

豊中「お前らいつの間にいい感じになってんのよ」

柳「まぁ」

豊中「もしかして、あの子が未央ちゃん？　お前がこの前泣き喚いてた？」

柳「やめてくださいよ」

豊中「おーい、言えよ！　最初からお前らのこと気にしてたのは俺だぜ？　え？　というか元々興味ないでーす、ってスカしてたのはどこの誰だったっけ？」

柳「そのことは忘れてください」

豊中「具体的に教えてくんないとダメー」

柳「俺だってわかんないんすよ。未央ちゃんがここに来るのは俺のためじゃない。俺のことを好きにならないのも知ってる。でもあの目を見ると、俺もあんな風に思われたい、俺のことも見て欲しいって思っちゃったというか何というか」

豊中「ええ？　脈あり、なし、どっち？　ま、

どちらにしろお前は本気ってことね」

柳「はい」

豊中「でも、また自分の欲求ばっか押し付けたんじゃ、同じことの繰り返しだぞ」

柳「わかってます。それに今回はいつもと違う気がするんです」

豊中「違うって？」

柳「誰かのために頑張るの、初めてなんです。正直すげー面倒くさいけど、やらずにいられないんです」

豊中「柳い。俺もしかして人様の初恋、目撃しちゃってる？」

柳「やめてくださいよ初恋なんて」

豊中「性欲と混同してはならない。そいつの心が恋という沼にはまったかどうかが重要なのだ。By 俺」

柳「うわー水溜りくらい深い格言っすねー」

豊中「おい、先輩ディスってんじゃねーぞ」

○公園・ベンチ（昼）

柳、ベンチに座る未央に、お菓子の入った袋を差し出す。

未央「どうしたの、こんなに」

柳「好きなだけ取って」

未央「いいの？　ありがとう」

未央、しょっぱい系の菓子を取る。

柳「酒のアテみたいなの好きなんだ」

未央「えっ（恥ずかしそうに俯く）うん」

柳「俺は断然甘党。これ全部田舎の母ちゃんからなんだけどさ、毎回懲りずにしょっぱいの入ってるんだよね。いい加減息子の好みくらい覚えてほしいっつーか」

未央「不器用だけど優しいとこ、柳君そっくりだね」

柳「えっ、優しい？」

未央「うちもさ、私の好みなんかは一切お構いなし」

柳「親ってそういうものだったりしてな」

未央「うちはちょっと特殊だけどね」

柳「どういう風に？」

未央「好きなものを否定されるから」

柳「あっ」

未央「一番わかってもらいたい人にわかってもらえない。だから親子関係もめちゃくちゃ。悪いのは私だけど……」

未央、遊具で遊ぶ母子を見る。

未央「孫の顔だって見せられるかわからない。（吹っ切れたように）あ～あ、どうせ私は少子化にも貢献できない落ちこぼれですよ～だ」

柳「（大声で）くだらねー！　（優しく）別にいいじゃん？　未央ちゃんが好きに生きられないくらいで滅ぶような国なら放っとこうぜ」

未央「ははっ、そんなこと言う人、初めて」

柳「本当は俺だって未央ちゃんと……いや、やっぱ何でもない」

未央「ええ？　いいよ、言って」

柳「ううん。……いつか、分かってもらえるといいな、親御さんにも」

未央「うん」

○工事現場・進入禁止ポール付近（昼）

未央の足元に猫が寄ってくる。

未央、猫を撫でる。

○工事現場・作業場・ショベルカー内（昼）

柳、猫と戯れる未央を見て、微笑を浮かべる。

レバーの操作に集中する。

○工事現場・進入禁止ポール付近（昼）

未央と猫の周りに虫が飛んでくる。

猫、それを追いかけ作業場に入ってしまう。

未央「あ、駄目！　待って！　戻ってきて！」

○工事現場・作業場（昼）

猫、柳のショベルカーに近づいている。

柳、それに気付かず黙々と作業してい

る。

○工事現場・進入禁止ポール付近（昼）

未央「柳君、柳君！」

未央、大きく手を振る。

○工事現場・作業場・ショベルカー内（昼）

柳、ショベルカーを旋回させる。

突然目の前に猫が現れる。

柳「あっ！」

岩永の声「柳！　止めろ！」

続いて、猫を追いかけて来た未央が視界に入る。

柳、慌てて機械を停止させる。

○工事現場・作業場（昼）

続々と人が集まってくる。

岩永「おい、誰か救急車！」

豊中、詰所に駆けて行く。

柳、ガタガタと震えてしゃがみこんで

いる。

柳「はぁっ、はぁっ、俺、あぁぁ、あああ！」

○病院・病室内（昼）

未央、頭と足に包帯を巻いたまま、外の景色を無心に眺めている。

○工事現場・詰所内（昼）

柳、退職の申し出をするため、岩永に頭を下げている。

岩永、引きとめようとするが柳に背を向けられてしまう。

豊中、柳を追いかけようとするが振り払われてしまう。

○病院・病室内（昼）

未央、外の景色を眺めている。

柳が病院の敷地に入ってくるのが見える。

未央「（嬉しそうに）あっ！」

佳苗、ノックもなく部屋に入ってくる。

未央「ママ」

佳苗「未央、調子はどうなの」

未央「うん、昨日より痛みはマシ。先生も経過は順調だって」

佳苗「（納得しない様子で）順調ねえ」

未央「ちょっと足の骨が折れたのと、頭も数針縫っただけだよ。大げさすぎるって」

佳苗「こんな怪我をさせられて大げさってあなた」

未央「ママ、これは私が」

佳苗「聞いたわよ。未央が助けた猫、工事現場の誰かがこっそり餌付けしてたせいで、あそこに居ついてたんだってね。それで中にも平気で入って」

未央「そうだけど、でも、違う！」

佳苗「まったく、野良猫に餌をやるだなんて。それにあなたも。言ったわよね、あそこへはもう二度と行くなって。親の言うことも聞かずに、挙句怪我までして」

未央「もうやめて！」

佳苗「これに懲りたら、退院後はきちんと学校に行って、他の子と同じように普通に暮らしなさい。わかったわね」

未央「わかったから、もう出てって！」

未央、泣くのを我慢するため布団に顔をうずめる。

佳苗、部屋から出る。

未央、窓の外を見ると、柳の後ろ姿が遠ざかっているのが見える。途中で一度振り向くが、そのまま病院を後にしてしまう。

未央、声をあげて泣く。

○工事現場・詰所内（昼）

職人たちが、休憩用の机や椅子を片付けている。

豊中、柳が未央を見ていた窓から、誰もいない道路を眺める。

○工事現場・進入禁止ポール付近（昼）

整地が終わった工事現場。

景色の違いに戸惑う未央が歩いている。

散歩中の男性に近づいて

未央「あの、すみません」

男性「はい」

未央「ここ、この前まで工事してたのご存知ですか。ショベルカーとかを使って」

男性「あぁ、終わったんじゃないですか。全部撤去されてますし」

未央「そうですか。じゃ、じゃあ、この人」

未央、スマホの写真フォルダを開く。

ショベルカーばかりで、柳の顔がはっきりと写ったものが一枚も無い。

イライラと写真をスクロールする。

男性「あの～、もういいですか？」

未央「ちょ、ちょっと待ってください」

男性「僕、もう時間が」

未央「すみませんっ」

男性、散歩に戻る。

未央、スマホを握り締めて、ジタバタとその場を歩き回る。

○コンビニ・裏口（朝）

柳、ゴミ袋を持ってドアから出てくる。

柳「お疲れっしたー」

ゴミ置き場にゴミを放り入れる。

○住宅街・工事現場（朝）

柳、別会社の工事現場前でふいに足を止める。

ショベルカーを眺める。

未央「柳君？」

柳、振り向くと、少し離れた所に未央の姿が。

○河川敷（昼）

柳と未央、気まずそうに並んで座っている。

二人の後ろを通りかかった人の影が未

央に重なる。

未央「ハッ（体を硬直させる）」

柳、未央を落ち着かせるため、未央の手をそっと握る。

柳「トラウマになった？」

未央、手を引っ込める。

柳「ごめん」

未央「……私、ずっと探してたんだよ。勝手にいなくなるから、凄い大変だった」

柳「俺、あわせる顔がなくて、ずっと逃げてた。本当にごめん」

未央「仕事、やめたの」

柳「……」

未央「どうして？　柳君は私に気付いて機械を止めてくれた。勢い余ってぶつかっていったのは私。他の人も見てた」

柳「ミーコを現場に居つかせたのは俺だから」

未央「でも柳君が面倒見てなかったら、ミーコは死んでたかも」

柳「そうとは限らない」

未央「私が悪かったの。私がもっと冷静でいれば、柳君にもショベルカーにも、こんな思いさせずに済んだ。本当に、ごめんなさい」

柳「ううん。そういえば親御さんは？　あれから、何かあった」

○住宅街・道路（昼）

柳と未央、並んで歩いている。

未央「ねえ、やっぱりやめよう。私、柳君が責められるの見たくない」

柳「ううん、行かせて。これは俺のケジメだから」

○未央の家・玄関内（昼）

未央、ドアを開けて

未央「ただいま。ママ、パパ、いる？」

佳苗、リビングから出てくる。

佳苗「未央、あなたすぐ帰るんじゃなかったの。予定より遅くなるなら連絡くらい」

柳「こんにちは、初めまして」

佳苗「あなたは……？」

○未央の家・未央の部屋（昼）

ファンシーな部屋の中に、恐竜の置物とスコップが飾られている。

それぞれにリボンが巻かれている。

柳、それらを眺めている。

未央「私が大事にしてたもの、もうそれだけになっちゃった」

柳「そっか……。このリボンは？　鞄の恐竜も付けてるよね」

未央「それは私が巻いたの。好きのしるし」

柳「スコップも好きだったんだ」

未央「小さい頃ね。四六時中見つめては話しかけて、一番の友だちから、いつしか恋人になってた。さすがに、引いた？」

佳苗と、立浪太一（47）が入ってくる。

太一「待たせたね」

柳「いえ。あの、柳といいます」
太一「こんにちは柳君。私は未央の父親だ」
柳「この度は、娘さんに怪我をさせてしまい、申し訳ありませんでした」
未央「（小声で）柳君、違うでしょ！」
太一「君か、事故のきっかけを作ったのは」
柳「はい」
太一「未央の頭、何針縫ったか聞いたかい？」
柳「いえ、それは」
太一「うまく髪で隠れているがね、それはそれは痛々しいものだよ。一歩間違えれば顔に大怪我だ。嫁入り前のかわいい娘に」
未央「パパやめて」
佳苗「あなたがどこまでご存知か知りませんけどね、この子はちょっと難しい子なの。これ以上困難を背負わされるなんてたまったもんじゃない。私たちはね、未央には普通に生きて、普通の幸せを手に入れてもらいたいのよ」
柳「普通？　普通って、何ですか。どうして

未央ちゃんの幸せを決め付けるんですか」

佳苗「まあ。謝りに来たんじゃなかったのかしら」

未央「ママ！」

柳「俺は至らない人間です。考えが甘いからこうして迷惑をかけた。だからそれは謝ります。でも未央ちゃんの生き方をそんな風に言うなんて（拳を握り締める）」

太一「我々に文句があるのなら、出て行ってくれるかな。ついでにもう未央にも会わないでやってくれ」

未央「パパ、待って！」

太一「君が嫌なら別に構わない。ただし君が未央に近づこうとすればするほど、未央は籠の中の鳥として生きることになるだろう」

未央、青ざめる。

柳「卑怯すぎる」

太一「君次第だよ」

柳「くそっ……わかりました。もう会わなか

ったらいいんですね」

未央「嘘でしょ、そんな」

太一「話が早くて助かるよ」

柳「未央ちゃんの自由な生活は保障されるんですよね」

太一「善処しよう」

○未央の家・玄関外（昼）

柳、壁に頭を打ちつけながら

柳「気にするな。未央ちゃんと出会う前に戻るだけだ。忘れろ。忘れろ！」

窓からの視線に気付いて顔を上げると、泣きそうな未央の顔が。

柳、ぐっと堪えて去っていく。

○コンビニ・店内（夜）

柳、店長（５０）と商品の補充をしている。

店長「柳君だいぶ慣れてきたね」

柳「あざっす」

橋本（２４）がコソコソ寄って来る。

橋本「ねぇ、柳君」

柳「なんすか」

橋本「来週の金曜空いてない？　合コン来れる子ひとり探してるんだけど」

柳「俺は……」

店長「こーらー、仕事中」

橋本「（頭をぺこぺこ下げながら）さぁせん。な、いいだろ？　彼女も暫くいないって言ってたじゃん」

柳「……」

客が入り、店が混んでくる。

店長「いらっしゃいませー」

柳「俺レジ行きます。（橋本にコソっと）合コンはナシで」

橋本「え～」

○コンビニ・レジ（夜）

柳、客の商品をレジに通している。

柳「ありっしたー。またお越しください」

未央、甘いお菓子が山盛りのカゴをカウンターに置く。

柳「（目線を上げず）らっしゃーせー。（レジに通していき）えー、お会計が、三八九〇円……」

柳、目の前の未央に釘付けになる。

未央、四千円を強めにキャッシュトレーに置く。

柳「あ、えと、四千円からお預かりします。ひゃ、百十円のお返しです」

未央、手を出さない。

しばらく見つめあう二人。

柳「未央……」

未央、お釣りと商品をさっと受け取り退店する。

柳、未央の後姿を目で追う。

○コンビニ・駐車場（夜）

駐車中の一台の車、徒歩で帰る未央を追ってのろのろと走り出す。

○コンビニ・レジ（夜）

店長「一瞬混んだね」

柳「はい」

店長「（外を見て）あ、やっとー？」

柳「どうかしたんですか」

店長「そこに車いたでしょ、黒い。一時間くらいかなあ？　買い物もせずにさあ。うちはパーキングじゃないっての」

柳「えっ」

○コンビニから続く道路（夜）

柳、駐車場を突っ切って出てくる。

数百メートル先に、未央らしき歩行者の影と、その後ろを走る車が見える。

○コンビニ・店内（夜）

柳、エプロンを脱ぎながら店内に入ってくる。

柳「店長、すみません、今日はもうあがりま

す」

店長「ええっ！　まだシフトが三時間も」

柳「お疲れっした」

○コンビニ・駐輪場（夜）

柳、原付を発車させる。

○道路（夜）

津山（３４）、車を未央に寄せて止める。

津山「あのぉ、すみません」

未央「はい」

津山「僕、知り合いの家に向かってるんですけどぉ。道が細くてナビが出なくて。一緒に地図見てもらっていいですか？」

柳、追いついてくる。

柳「未央ちゃん！」

後部座席に座っていた兵頭（２９）、未央を車内に引きずり込む。

未央「えっ、何、きゃあ！」

柳「おいこらお前！」

車、猛スピードで走り出す。
柳、後を追う。

○廃工場周辺（夜）
柳、車を見失う。
柳「くそっ」
原付を降り、徒歩で捜索する。

○廃工場内（夜）
未央、手足口を縛られた状態で床に転がされている。
津山、未央の写真を撮っている。
未央「〜〜！」

○廃工場外（夜）
柳、扉の隙間から漏れる光に気付いて近寄っていく。
リボン付きの恐竜のキーホルダーが落ちているのを見つける。

○廃工場内（夜）

未央、津山に襲われそうになっている。

柳、勢いよく扉を開ける。

柳「未央ちゃん！」

未央「〜〜！」

津山「チッ」

柳「（スマホで電話しながら）もしもし警察ですか。今すぐ」

津山「おい！　（兵頭を呼ぶ）」

兵頭、柳の後方からスマホを奪う。

柳「この野郎」

兵頭、柳に殴りかかる。

柳、応戦する。

津山「とっとと殺っちまえ！」

攻防の末、柳が兵頭を殴って失神させる。

津山「チッ、使えねえなあ。オラァ！」

津山、鉄の棒を持って柳に襲い掛かる。

素手の柳、津山から逃げまわる。

津山「待てコラァ！」

柳「うっ」

柳、津山の一撃を食らって倒れこむ。

津山「ったく、手間かけさせやがって。兵頭、早く起きろ！　こいつ始末しろ」

兵頭「（地面に伸びたまま）う～～」

津山、未央を再び襲う体勢に入る。

柳、朦朧とした意識で、廃ショベルカーが端材の山につっこまれているのを確認する。

○廃工場内・ショベルカー内（夜）

柳、フラフラとショベルカーに乗り込む。

鍵が付いたままになっている。

柳「（エンジンをかけながら）頼む、動いてくれ！」

○廃工場内（夜）

津山、ショベルカー内の柳に気付く。

津山「お前、懲りねぇ野郎だなあ！」

ショベルカーの足場となっている端材を蹴り飛ばしながら柳に近づき、車内から引き摺り下ろす。

その拍子に、足場の悪いショベルカーがグラっと揺れる。

津山、倒れこむ柳を殴る。

津山「邪魔しやがって、オラァ、オラァッ！」

津山、柳が動かなくなったのを見て立ち上がる。

歩き出したところで、柳に思い切り足首を掴まれ転倒する。

津山「まだ意識があったのかよクソッ」

柳「そんなことよりおっさん、安全確認第一だぜ」

柳、ショベルカーのバランスを保っていた最後の一片を蹴り飛ばす。

津山「なにっ！」

ショベルカーが柳と津山のいるほうへ倒れる。

○廃工場外（夜）

パトカーと救急車が停まっている。

兵頭、警察に連行される。

津山、担架で運ばれている。

柳、傷の手当を受けている。

○廃工場内（夜）

未央、横転したショベルカーに近づく。

警察「すみませんが立ち入り禁止です。あちらで手当てを」

未央「命の恩人なんです。ほんの少しでいいので」

未央、ショベルカーに手を当てて目を瞑る。

○廃工場外（夜）

未央、柳に駆け寄る。

未央「柳君！」

柳「未央ちゃん！」

未央、柳の包帯に巻かれた部分にそっ

と触れる。

未央「ありがとう。私、柳君に助けてもらってばっかり」

未央、涙を零し始める。

未央「怖かった」

柳「ごめん、俺が弱いせいで」

未央「違う。柳君が死んだらどうしようって」

柳「っ！」

未央、柳を抱きしめる。

未央「生きてる、柳君が生きてる。ここにいる……良かった」

柳「未央ちゃん……ずっと迎えに行かなくてごめん。逃げてばっかでごめん。俺、デカくもない強くもないちっぽけな人間だけど（真っ直ぐ目を見て）未央ちゃんを護りたい。もう失いたくない。俺に興味なんか無くたっていい……ただずっと傍にいてほしい」

未央、困惑したように目が泳ぐ。

柳「迷惑なのはわかってる。でも俺、未央ち

ゃんが好きなんだ」

未央「柳君、私」

警察「すみません、立浪さん、ですね？　恐れ入りますがあちらでお話を伺わせてもらっても？」

未央「は、はい」

柳「未央ちゃん……」

未央、立ち上がって警察と共に歩いていく。

柳、決して振り返らない未央の後姿に拒絶の色を感じ取り、表情を曇らせる。

○コンビニ・店内（昼）

柳、無気力に商品を補充している。

店長「柳君、そろそろ休憩どうぞ」

○コンビニ・休憩室（昼）

椅子に深く沈む柳、スマホの着信通知を見て背筋を伸ばす。

○建設会社・事務所内（昼）

岩永と豊中が、柳を出迎える。

岩永「柳。元気だったか」

豊中「会いたかったぜ」

柳「いいんですか、本当に、俺」

岩永「安全は皆で守っていくもんだ。今のお前にはその大切さが誰よりも分かるだろ」

豊中「それに、お前と働きたいっていう仲間も増えたしな」

会社の作業着を来た未央が入室する。

柳「未央、ちゃん」

○建設会社・屋上（昼）

柳、未央と共に重機を見下ろしている。

未央、嬉しそうに機械免許の終了証をショベルカーに重ね合わせて見る。

柳「未央ちゃん、いつの間に。親御さんは」

未央「（首を横に振り）でもいいの。いつかきっと分かってもらうから」

柳「そうか」

未央「あの時の返事、してもいい？」

未央、リボンを付けたショベルカーの鍵を見せる。

柳「（残念そうに）やっぱり、そう、だよね」

未央、もう一方の手で、何も付いていないリボンを見せる。

柳、はっと目を見開く。

未央「これでもいいなら、ずっと傍にいさせて欲しい。そしたら私、いつか変われるかも」

柳、リボンを受け取る。

未央の肩を掴み、抱きしめるか否か悩む。両手を握りしめることにする。

柳「変わらなくていい。俺が好きになったのは、そのままの未央ちゃんだから」

○工事現場・作業場・ショベルカー内（昼）

柳、岩永に仕事を教わっている未央とふいに目が合う。

互いに笑顔で頷き合う。

鍵と、自分の襟に付いたリボンに指先で触れ

柳「よーしっ」

柳、仕事に取り掛かる。

おわり